

司式 杉山昌樹牧師

前 奏

奏楽 豊島慶子姉

開 会 招 詞 詩編100編1-5節

* 賛 美 歌 18:1 (ソングシート)

1. 牧人ひつじを 守れるその宵、妙なるみ歌は 天より響きぬ。

喜びたたえよ、主イエスは生れぬ。アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈禱書2 罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。主イエス・キリストの御名によって。アーメン。 (詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈禱書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。 (出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 98:1

1. 天にはさかえ み神にあれや、土にはやすき 人にあれやと、み使いたちの たたうる歌を 聞いて諸人 共に喜び 今ぞ生まれし 君を讃えよ アーメン

共同の祈禱 降誕節 第四主日 誕生

聖なる神さま、あなたを賛美します。あなたは、神の独り子を人として生まれさせ、彼を信じる者が罪から救われ、神の子となる力をお与えくださいました。

救い主がお生まれになったとき、あなたは、羊飼いや博士たちが、キリストを礼拝できるように導かれました。そのように、あなたの御言葉と聖霊は、あらゆる時代を通じて、あらゆる所で、キリストを礼拝できるように導いてくださることを感謝します。

今わたしたちは、キリストを礼拝する、この教会へと導かれました。神の子となるように招いてくださった、あなたの御心を、豊かにいただくことができますように。アーメン

(ヨハネ1、ルカ2、マタイ2)

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 神学研修所 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

聖書朗読 イザヤ40章1-11節 (旧約聖書1123頁)

ルカ2章15-20節 (新約聖書103頁)

説教・祈祷 「言葉の響きはつづく」 杉山昌樹牧師

* 賛美歌 98:2-3

2. 定めたまいし 救いの時に、神のみくらを 離れて降り 御霊によりて おとめにやどり
世びとの中に 住むべき為に いまぞ生まれし 君をたたえよ。

3. あさ日のごとく 輝き昇り み光をもて 暗きをてらし、土より出でし 人を活かしめ、
尽きぬ命を 与うるために、いまぞ生まれし 君をたたえよ。アーメン

* 主の祈り 祈祷書1

天にまします我らの父よ

願わくは御名をあげさせたまえ

御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ

国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 67

主イエスのめぐみよ、ちちのあいよ、みたまのちからよ、あみさかえよ。アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 古澤兵庫長老 (司会・受付 次週：門脇陽子長老)

本日 受付 1階：若月学・森永美保執事 2階：加藤良明執事 / ZOOMホスト・録音：森永翔馬

次週 受付 1階：那珂信之・藤井牧子執事 2階：大日南隆夫執事 / ZOOMホスト・録音：門脇光生

※ グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

ルカ2：15-20 「言葉の響きは続く」

教会の敷居

今日は、あるいは今年に限っては今日もクリスマス礼拝です。クリスマス礼拝と言いますと華やかなイメージです。そこにふさわしくないかもしれませんが、今日は一つのことを確認したいのです。教会の敷居という言葉があります。一般的に、敷居が高い、入りにくい、と言われてしまっているようです。世間の人たちがそういうだけではなく、私たちキリスト者もまた、教会の敷居が高いから、なかなか人が集まってくれない、というような言い方をすることがあります。切実な問題ですし、たしかにそのような面があるのも事実です。でも、そもそも、教会とはキリスト教とはそのようなものだったのだろうかとも思います。むしろ、キリスト教とは、もっともっと私たちに近いものだったのではないのでしょうか。それは、まさに今お読みしましたイエス様の誕生の個所からも言えるはずなのです。

羊飼いのイメージ

今日は15節からにしましたけれども、当然ながらこのところは1節から7節までのイエス様のご誕生と、その知らせが、羊飼いたちに伝えられる8節から14節までと一体的な関係の中にあるのは言うまでもありません。とりわけ、イエス様がひっそりと、家畜小屋の中で生まれられ、動物の餌を入れる箱、飼い葉おけの中に寝かせられた、ということ自体、その始まりからして、決してきらびやかではなく、むしろ最も低い場所にイエス様がやってこられたことを物語っているとすらいえます。そして、そのようなイエス様のご誕生が第一に知らされたのは羊飼いたちでした。聖書において、羊飼いは決して悪いイメージではありません。むしろ、国のかじ取りをする王が羊飼いに譬えられることすらあります。有名な詩編23編では、「主は羊飼い」で始まりますし、サムエル記ではダビデ王に対して「わたしは牧場の羊の群れの後ろからあなたを取って、わたしの民イスラエルの指導者にした」と語り掛けられています。ところが、実際にイエス様の生まれられた時代の羊飼いについて言いますと、その社会的な地位はとても低かったようです。一つには、彼らが定住せず、いつの間にかやってきて他人の土地を使い、またどこかへと去っていく、そのようにしか仕事ができなかった、ということがあります。さらに基本的に休むことができませんので、律法に従って安息日を守る、祭りを守る、ということも出来なかったようです。それでユダヤ教の教えをまとめた書物の中でも「強盗、野蛮人」と書かれてしまっていたのです。しかし、そのような人たち、ユダヤ教の中に居場所を持たない人たちの所にまず良い知らせは届けられたのでした。

不思議なしるしがやってくる

さらに言うのなら、この届けられるということが大切です。最初に敷居ということを行いました。例えばわたしたちが、教会の敷居をまたいで入ってくる人を待っているということがあったとします。外にいる人たちは、どうもここは入りにくいのですとか、入ったらとんでもないことになるのではないかとあれこれ考えて不安に思ってしまう人が多いというのが現実なのかもしれません。しかし、イエス様のご誕生という事実について考えてみますと、それは全く向こうからやってきているのです。そもそも、イエス様が生まれられるということ自体、神様がこの地上に新しい命を、それも、神様ご自身が永遠から共に過ごしておられる独り子を、地上に人として送り出すということにほかなりません。神様の方からやってきているのです。そして、そのようにして、イエス様が地上に与えられたという知らせもまた、誰かが気づくのを待っているのではなくて、み使いを派遣して、いわば、自分から出かけて行って新しいことが起きたと、かなり派手な現れ方で、羊飼いたちに知らせているのです。ここで明らかなのは、神様は、ご自身をぐいぐいと表される方だ、ということです。神様の知らせは力をもって、勢いをもって私たちのとこへと迫ってくるのです。そして、神様の告げ知らせる言葉には、私たちの心をわしづかみにする確かな力があるのです。この所では、一人の天使がイエス様のご誕生の意味を語った後で、天からの大群によって大合唱がなされています。

天使の歌声

それが14節の言葉です。改めて読んでみます。「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う人にあれ。」当然ながら、これは、イエス様が生まれられたことで神様の栄光が現れ

た、ということです。そして、それは地上と関係ないことではなく、むしろ深くつながっています。私たち一人一人とつながっています。それは、ここで、天と地が両方語られていることから明らかです。天で栄光がある、それは地に平和があるからです。別々のことではないのです。ではこの平和とは、何のことでしょうか。それはとても具体的なことです。それは例えば、イザヤ書に書かれておりますような事態、「囚われている人に開放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるため」（ルカ4：18、イザヤ61：1, 2）という言葉で表されていることです。さらに言うのなら、これは、律法に記されているヨベルの年のイメージと重なるかもしれません。ヨベルはレビ記に記されています。その一部はこうなっています。「この五十年目の年を聖別し、全住民に解放の宣言をする。それが、ヨベルの年である。」（レビ25：10）。このヨベルの年には、借金がチャラにされ、奴隷となっていた人は、自由になることができる、という決まりです。これがどのくらい厳密に守られていたのかは実際にはわかりません。恐らく完全に実施されていなかったのではないかと思います。しかし、イエス様がもたらすのは、このような意味での開放であり自由なのです。それが、み心に適う人にある、もうあるようになっているのです。

わたしにとどいている

そして、み心に適う人とは、だれか特別に選ばれた人ではありません。なぜなら、イエス様は「民全体のため」に来られたからです。丁度、イエス様が神様にとって、「私の愛する子、私の心に適う者」（ルカ3：22）であるように、この私が、私たち一人一人が神様の喜ぶものとされる、それがこの言葉の意味です。神様が私たちを喜んで下さる、これこそが神様の栄光の現れです。恐らく、羊飼いたちは、この言葉を、この通りに、自分たちにとって、全く新しいことが起きている、と受け止めたのです。さらに、そのようなことが起きている確かなしるしがあると、言われたのです。それこそが、布にくるまって飼葉おけの中で寝ている乳飲み子です。羊飼いたちは、天使が離れ去ったときに、自分たちの運命が全く新しくなったことをどうしても確かめてみたくなったのです。そして、互いに呼びかけて言いました。「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」。そしてそれは決して難しいことではなかったはずですが、なぜならそれはある意味で、とても分かりやすく探しやすいしるしだからです。何しろ、羊飼いが絶対に足を踏み入れられない宮殿でも、立派な屋敷でも、高級な宿屋でもない馬小屋で、しかもそんなことは普通はあり得ない、餌箱をベッド代わりにした赤ちゃんを探すのですから。これほどはつきりとしたしるしはまたとないのです。そして羊飼いたちは、急いでベツレヘムに出かけて行って、見事にイエス様を見つけ出しています。

人々に話す

ヨセフとマリアに見守られて飼葉おけの中で眠っているイエス様を見つけた羊飼いたちは、思わず自分たちが天使から聞いたことをありのままに話しています。「天使が話してくれたことを人々に知らせた」とある通りです。彼らは自分たちの救い主が生まれたこと、それがこの赤ちゃんであることを、一所懸命語ったことでしょう。それは自然と溢れ出る言葉だったはずですが、自分たちに語られた言葉、自分たちは周りの人々から、神様とは関係ないと言われてきたけれども、しかし、そうではなかった、自分たちもまた、そんな神さまならいない、と信じていたけれどもそうではなかった、神様が自分たちを喜んでくださっている、そのしるしの赤ちゃんをはつきりと見た、その喜びが、この時、羊飼いたちの口を開かせたのです。こんなことを言うては何ですけれども、教会において語られるべき言葉の、最も大切なことがここに示されている気がします。説教のことば、祈りのことば、そのような教会で口にされる言葉、そのような言葉は、見せかけのことばであってはならないのです。お飾りのことばであってはならないのです。むしろ、本当に口をついて出てくる言葉であるはずなのです。

驚き思いめぐらす

もちろん、そのようにして、力いっぱい語られた言葉が、そのまま、いつでも相手に通じるかどうかはわかりません。この所では町の人たちとマリア、それぞれの受け止め方が記されています。町の人たちは、不思議に思った、とだけシンプルに報告されています。それは、それ以上でもそれ以下でもありません。しかし、不思議に思うこと事態は悪いものではありません。そこから何かがある人の中に残

るかもしれないからです。その点で、マリアはまさに、このことを深く受け止めた人として描かれています。言葉を受け取ったのです。「これらの出来事をすべて心に納めて、思いめぐらしていた」とあります。丁寧に、丁寧に、羊飼いたちのが知らせた言葉、その出来事の意味を、思いめぐらし訪ねようとしているのです。その先には、マリアとしてのイエス様に対する理解が広がっていくことになります。このように語られた言葉は、それで終わりなのではなく、聞いた人もまた言葉と一緒に生き始めることが起きるのです。そしてその先には、さらに言葉が語り伝えられることが起きていくかもしれないのです。このようにして、神様の言葉は、人から人へと語り伝えられ進んでいくのです。それが止まることはないのです。言葉が、じっと戸の中にしまい込まれてしまうことなどありえないのです。敷居の中に押し込められてしまっただけではいけないのです。むしろ神様の言葉は、この世界へと広がっていくのです。それは神様の言葉を聞いた人を通してです。

喜び賛美する一返っていく羊飼い

20節では、羊飼いたちは、神をあがめ賛美をした、と短く報告されています。それはまさに天使たちの言ったことが本当であったこと、すなわち、神様が自分たちを喜んでくださっていることが分かったからです。自分たちと神様は、もはや関係ないものではなく、深い関係の中にあることを知ったのです。神様が、自分たちの神様となってくくださった、このことを知った喜びに満たされて、羊飼いたちは、歌を歌ったのです。それは野太い、調子はずれの歌だったかもしれませんが、しかし、それは本心から、神様を喜ぶ歌声です。そして、それは、あの天使たちの歌と重なっていく歌です。「いと高き所には栄光、神にあれ、地には平和、み心に適う人にあれ」。いや、もうここに平和が来ている、といって喜び歌う歌声です。

言葉の響きは続く

そうして、彼らは、普段の仕事へと帰っていったのです。彼らの厳しい仕事の中に、彼らと出会う人たちの中に、この神様からいただいた喜びの歌を携えて、帰っていったのです。このようにして、喜びの歌の響きは、私たちのこの世界に入っていくのです。それはすでにお話ししましたように、どこかに押し込めておくことはできません。むしろ、この世界に広がり続いていくのです。こうしてクリスマスの喜びの言葉の響きはこの世にあまねく、響きわたるのです。

祈り

父なる神様、あなたは御子を遣わし、そのことによって私たちがあなたの良しとされる、あなたの子とされていることを示されておりますから感謝します。なお、思わしくないことも多くあるこの世界の中で、あなたの喜びのしるしが示されております。私たちが、新たにこのことを受け取り、み使いたちの歌に、また羊飼いたちの歌に連なって、地上で喜びの歌を、あなたをほめたたえる歌を歌いつつ、歩むものとさせてください。どうぞ地に平和がありますように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン